

コメント (3)

豊田周子

今回、橋本氏が上梓した『華麗島文学志』とその時代—比較文学者島田勤二の台湾体験』（三元社、2012）は、島田謹二の外地における日本文学研究の集大成である『華麗島文学志』（以下、『文学志』と略）が、著者の本来的意図を離れて誤読されてきた理由を、時代状況に照らして考察したものである。のみならず、本書は、島田の思想的限界や、植民地に生きる日本人が抱える問題、そして台湾人の文学史的戦略というように、植民地という場に付随する様々な問題を丹念に解きほぐしながら誤解の全貌を明らかにしている。また同時に、戦後日本人が忘れさろうとした植民地の問題について、それも今日まで誰も手をつけなかった島田謹二という学問的権威の過去の業績に批判的に向き合いながら、これからの比較文学研究の在るべき姿を模索した優れた研究である。

橋本氏のこのような研究スタイルは、植民地統治下の台湾人知識人の精神活動について、彼らの文学作品の分析を通じて考究してきた評者の研究スタイルとは、対象の選定方法もアプローチの仕方も基本的に異なっている。しかし、本書を通じて、植民地に生きた人間の精神活動をこのように掘り起こし、歴史の事実に向き合うことが可能であることを教えられ、また共感する点が多々あった。

『文学志』に収録された論考の多くは、本書の121頁の表が示すように、40年代までに書かれたものである。評者がこの度、書評を担当した五章、六章、終章のうち、五・六章は、『文学志』の40年代以降における、外的あるいは内的影響について論じたものである。以下にまず、その概要を述べてみたい。

第五章『華麗島文学志』の受容—1940年代の台湾文壇と島田謹二—では、『文学志』が40年代の台湾文芸界に如何に受容され波紋を投げかけたかという問題について、とりわけ外地文学論や文学史観について検証されている。本章は全四節からなる。

第一節「台湾文壇の再編成」では、40年代の台湾文壇において、「台湾文学」を担う主体が、台湾人から日本人に移行してゆくなかで、島田自身は、台湾文学は台湾人によるものであり、在台日本文学の「外地文学」は「台湾文学」ではない、とする30年来以来の考えを保持していたと述べられている。しかし、こうした島田の思惑とは異なり、40年代の文学界では台湾内部の状況変化から、「台湾文学」の捉え方自体に様々な解釈が生じていたことが明らかにされている。

第二節『台湾文学の文学的過現未』再読』では、島田が41年5月に発表した「台湾の文学的過現未」の発表意義と、この論評が引き起こした問題が考察されている。「台湾の文学的過現未」は、領台以降の台湾における「日本文学史」として書かれたため、描写対象は必然的に外地の日本文学だった。しかしそれが、台湾人を無視した日本人中心の台湾文学史と誤読され、また

島田が提示した在日台文学のための「郷愁・エグゾティスム・リアリズム」という課題も、「台湾文学」の課題であると誤って解釈されてきたことが指摘されている。

第三節「『エグゾティスム』批判と『リアリズム』の提唱」では、島田は「外地文学」の課題として、在日日本人作家にのみ「郷愁・エグゾティスム・リアリズム」を要求したが、それが台湾人にも要請した「台湾文学」の課題として受け取られたことにより、40年代半ばから二年にわたって、台湾文学界で「エグゾティスム」批判や「リアリズム」の提唱の動きが生じたと述べられている。

第四節「『台湾文学』の定義と『文学史』観をめぐる議論」では、島田が40年代の台湾文壇に投げかけた波紋について検討されている。当時、島田が構想した文学史は「台湾文学史」ではなく在日「日本文学史」だった。だが、台湾人にも開かれた文芸誌『愛書』に発表した「台湾に於ける文学について」と題する文章において、「台湾の文学的過現未」時に用いた在日日本人文学の時期区分を適用したり、領台後の文学史の叙述を日本人中心に行うなど、台湾人の文学（とりわけ20年代以来の新文学）を無視する記述をしたことが、黄得時ら台湾人文学者の反感を招いたとの分析がなされている。

第六章「太平洋戦争前夜の島田謹二—ナショナリズムと郷愁」は、島田の初山衣洲論を取り上げ論じたものである。橋本氏は、この島田の衣洲論を『文学志』の中でも白眉の出来と看做し、西洋の学問の応用という点からも戦前の島田の研究の到達点と位置づける。内容は四節からなり、島田の「外地文学」の三つの課題のうち、従来の研究でとりあげられてこなかった「郷愁」を検討している。また、戦後の島田の「明治ナショナリズム」への関心が、太平洋戦争勃発前夜の昭和ナショナリズム高揚時期にすでに台湾で萌芽していたことが指摘され、国家主義の吹き荒れる時代に、島田が個人と国家を如何に見すえ文学研究を進めたかが、「郷愁」と「明治ナショナリズム」というキーワードを通じて考察されている。

第一節「作家研究の確立」では、島田が、海外逗留経験のある著名人の他郷での生活を時系列的に辿り、その人物が身を置いた環境を関連テキストから実証的に描出してゆく文学研究の方法を創出したことが述べられている。また初山衣洲の漢詩文を論じたものは、島田の前には尾崎秀真のものが確認されるのみであることを示し、初山衣洲の公的側面と私的側面とを光栄と憂愁のコントラストとして描いたところに島田の衣洲論の価値を見ている。

第二節「明治ナショナリズム研究の淵源」では、島田は、「ナショナリズム」や「愛国主義」を「文明国家」に限って認めていたものの、植民地で異民族に対して発揚された「ナショナリズム」が「帝国主義的」かつ「植民地主義的」であることには鈍感だったことが指摘されている。また、方法論においても、島田は台湾人の文学については比較文学の「影響研究」ではなく「対比研究」の視点を持ち込むことで、日本人の優秀性を保とうとし、台湾と日本の交渉研究の可能性を模索しなかったことが指摘されている。そして結局それは、西洋を最上位とする文明のヒエラルキーに日本や台湾・中国を位置づけたにすぎなかったとの批判的評価を与えている。

第三節「『郷愁』の行方」では、島田の「郷愁」とは、単なる「望郷の念」ではなく、植民地という特殊な環境が、宗主国人に引き起こすマイナスの心情の総体を意味するものであったこと、それは、領台初期から昭和期まで在日台文学の一脈を形成していたテーマであったこと説明されている。

第四節「植民地の比較文学」では、衣洲の「闇」の描写からは、日中戦争が激化するなかで、国家に寄り添うかあるいは個に立ち返るかという島田の思索の痕跡がうかがわれることや、太平洋戦争勃発後に島田が反戦の立場にとどまれたのは、他国の尊重をモットーとしたフランス比較文学者の雑誌『比較文学雑誌』の購読経験に拠る所が大きかったとも指摘されている。一方で、島田は、中国や台湾にはナショナリズムを、西洋にはインターナショナリズムを、というようにダブルスタンダードを有していたことも明らかにされている。

終章「二つの文学史における『華麗島文学志』の意義」は全三節からなる。

第一節「日本近代比較文学史における『華麗島文学志』の意義」では、島田にとって『文学志』とは、台湾（植民地）・日本（本国）・世界の間でナショナル（ローカル）な精神とインターナショナル（グローバル）な精神を同時に生きる経験を通して、比較文学の精神を鍛える実験場であったと述べられている。しかし島田は、「文学の国際主義」によっても自らの成長の過程で刷り込まれた蔑視を克服できず、一國文学の理論を堅持したこと、その根底には、台湾の支配を前提とする植民地生活者の現実的メンタリティーがあり、それが島田の比較文学の思想に限界を課したとの分析がなされている。またそのような、『華麗島文学志』に内在する「限界」が、従来の解釈では「歴史的制約」や「時代の制約」と見做されてきたと論じられている。

第二節「台湾文学史における『華麗島文学志』の意義」で、橋本氏は、『文学志』を、30年代後半の時代状況を背景に誕生した台湾における「日本文学」研究として、また台湾における日本文学を体系的に捉え、30年代後期から40年代初頭の台湾で、在日日本人の「時代精神」を掬い取り文芸のあり方を示した書物として評価する。同時に、永住を覚悟した島田が台湾と如何に向き合うべきかを、在日日本文学の過去・現在・未来を通じて考察した記録として、アカデミズムの枠を超えて時代状況と関わりながら学問を鍛えた記録として、さらには日本の台湾統治の最終十年間の生活者の記録として位置づけている。

今後の研究のあり方としては、『文学志』を「台湾文学」研究と看做してきた従来の議論や、島田の示した「外地文学」の理論と日本人作家が行なった実践との関係を、再検討する必要があると問題提起する。まず、(1)「外地景観描写の文学」(エグゾティスム)について、台湾の何が美しいかを追求・表現することは、日本の価値判断に変革を迫り、新たな言語の創造を促し、「在日日本人」というアイデンティティーの再考を要請するものだと指摘する。次に、(2)「民族生活解釈の文学」(リアリズム)について、皇民化政策が進行し日本人が湾生化を迎えた時代に、「心理的リアリズム」を掬い取って、島田の言うような「生きたまま生に即して描」き、「生の実相に透徹せしめる」ことが果してどこまで可能だったかを、40年代の文学作品を通じて検証するべき必要性を指摘する。そして、(3)「広義の郷愁の文学」について、領台末期には、在日日本人の内部で「内地」と台湾に対する心理的距離間に変化が生じ、台湾は「郷愁」の対象ともなり、棄郷や祖国喪失の悲哀とも相俟って、「熱帯神経衰弱」のような心因性の病の一因となったことが述べられ、植民地における宗主国人の生の意味を問う上で、この「郷愁」の検討が不可欠であると指摘する。

第三節「比較文学の可能性」では、島田が西欧比較文学の根強いヨーロッパ中心主義を克服しようとした点は評価できるが、結局島田の戦前の研究は、西洋の基準により日本を中国・台湾の上位におきアジア蔑視を残しており、不均衡な世界観が戦後の比較文学にも継承されたこ

とが述べられ、それが今日まで台湾人研究者の根強い負の感情の根元であると結論づけている。

最後に、橋本氏は、今後はアジア諸国との間に相互的憎悪を解消し、信頼関係を育成する精神的枠組みを構築することが重要であるとの見解を示している。そしてそのことは、比較文学の研究や教育を通して、どのような対外的価値観を生み出すか、我々の時代が必要とする思想をどのように実践してゆくのか、という学問の本質を問うことにも繋がることと述べて、本書を締めくくっている。

以上が、本書の第5章から終章までの概要である。

次に、橋本氏のご著書へ敬意を込めて、大きく以下の五点についてお尋ねしたいと思う。

(1) まず、第五章において、橋本氏が、41年に「過現未」が再度発表されたことの意義は、前稿テキスト(39年)との相違から見てくる(356頁)と述べられている点についてである。本論の説明だけでは、評者にはやや理解が追いつかないところがあるため、41年に「過現未」を再発表するに値する意味がどういうことかを改めて伺いたい。自説を貫こうとしたという意味での意義なのか。あるいは40年代の文壇状況にどのようなスタンスで臨んだかという意味なのだろうか。同様に、終章でも「意義」と言う言葉がしばしば出てくるが、「意義」という程には、はっきりとした意味づけがなされていないような印象も受けた。

(2) 第六章の第三節で、支配・被支配の関係を維持するため、「対比」による民族の優劣を序列化する姿勢の背後には植民地で生活の既得権益を守ることがあり、それは比較文学という学問によっても修正困難であった、と述べられている。だが、島田の台湾や台湾の文学や統治に対するスタンスは、当時在台日本人知識人の中でどのように普遍的あるいは独特であったのかが、同時代の類似した境遇にある対比例が示されていないこともあり、判然としない。本論では、尾崎秀真が島田と同様の価値観を持つ人物としてしばしば引き合いに出されている。しかし、二人の境遇は大きく異なっており比較には適さないように思う。そこで例えば、戦時中、島田が台北帝大の教員のなかでは少数派のリベラルな立場を取っていたと書かれていた箇所(468頁)の、注113(485頁)に名がみえる工藤好美について考えてみたい。周知のように、工藤は台湾人作家の呉濁流(1900-76)との密な交流があった。彼は、決戦時期台湾の極めて厳格な言論思想統制下に、呉濁流が生命の危険を顧みず日本植民地統治の実態の告発文学といえる長編小説『胡志明』を書くにあたって、呉を激励した人物でもある。このように工藤は、反戦派であると同時に台湾人にも胸襟を開いた知識人と見なせるが、1898年に生まれており、島田と同年代にして英文学者でもあった。島田は太平洋戦争時代に時代の制約に無批判ではなく、植民地統治下に生活の糧を得たり既得権益を守るために統治に抵触する問題(民族間の交流)を拒絶したという橋本氏の結論は納得のゆくものである。しかし、工藤が受け入れることができ、島田が超えられなかった民族の壁とは果して何だったのだろうか。あるいはそれは島田個人の私的な部分と関わりがあるのかということをお尋ねしたい。

(3) 終章の第二節「台湾文学史における『華麗島文学志』の意義」で、橋本氏が述べられるように、『文学志』を日本文学史に位置づけることは可能だと思うが、台湾文学史に位置づけることは果たして可能なのだろうか。つまり、橋本氏が題目として書かれた『文学志』の「台湾文学史における意義」が、つまりはどのような価値を持つものなのかという問いである。

評者なりに、「志」という文字の持つ意味を斟酌した上で、島田の述べるところ(例えば「台

湾の文学的過去に就て—「華麗島文学志」緒論』『華麗島文学志—日本詩人の台湾体験』〔明治書院, 1995〕, 21頁)をまとめれば、『文学志』とは、「文学史の材料となるような、台湾における日本人の手による、基礎的史実を書き記したもの」であると解釈する。しかし、だとすれば、小説や詩などのフィクションと、こうした史実の記録を同等に位置づけるのはいささか無理があるのではないだろうか。それともあるいは、評論という位置づけになるのだろうか。

(4)『文学志』が台湾における日本文学研究であることは、橋本氏のご説明から十分に納得できる。一方で、終章における「新たな議論にむけて」の三つの項目は、日本文学研究という領域で再考されるべき課題なのか、それとも台湾文学研究のなかで再考されるべき課題なのかという疑問が浮かび上がってくる。つまり、島田が『華麗島文学志』で扱った外地の日本文学を、今後どのような文学的な枠組みから評価することが適当だと考えておられるのかを伺いたいと思う。

(5) 終章の第二節で、「外地景観描写の文学」(エグゾティズム)について、橋本氏は、台湾の何が美しいかを追求したり表現することは単なる審美の問題ではなく、それは日本的価値判断に変革を迫って新たな言語の創造を促し、「在台日本人」というアイデンティティーの再考を要請すること(497, 498頁)、だと書かれている。しかし一方で、「エグゾティズム」や「郷愁」という言葉には一評者の偏見も多分に含まれるが—本来的に、中央集権的な発想からくる外地蔑視の意識が込められている気がしてならない。そのように捉えたとき、「湾生」という台湾を故郷とする在台二世の人にとっての台湾の美が、「エグゾティズム」や「郷愁」という言葉によって表すことは可能なのだろうか。

